

民俗博物館だより

Vol. VIII No. 1
1981. 6. 15



観音まつり（下市町下市 観音堂）

目 次

第2次民俗資料収集を終えて	1
三面オートスライドの映画制作にあたって —映像展示とソフト制作—	3
大和の三大練供養会式 —当麻寺・矢田寺・久米寺—（大和の民俗行事㉓）.....	4
博物館と教育普及活動 —とくに展示活動から—（地方博物館を考える㉑）.....	6
お知らせ・他	7

第2次民俗資料収集を終えて

浦西 勉

民俗資料の収集 私達の過去の歴史を知るためには、必ず過去の歴史を知り得る資料がなくてはなりません。その過去を知り得る資料には、大雑把に言って、文献、遺物（考古資料・民俗資料）、伝承などがあります。奈良県立民俗博物館は、奈良県内に残る、民俗資料を中心に伝承や文献などを収集して、奈良県の歴史を知るための資料としております。

なぜ私達の過去の歴史を知る必要があるのかといえば、私達の今ある姿は過去からの長い歴史の光の上に立っているからです。現在を知るには長い過去からの歴史を知ることが必要です。そのためには過去と現在を結びつけてくれる資料が必要なわけです。

民俗博物館の対象としている分野は次の通りです。

① 衣、食、住 ② 生産生業（農耕、山樵、漁撈、狩猟、養蚕、畜産、染織、手工製造、諸職）③ 交通、運輸、通信 ④ 交易 ⑤ 社会生活 ⑥ 信仰 ⑦ 民俗知識 ⑧ 民俗芸能、娯楽、遊戯 ⑨ 人の一生 ⑩ 年中行事 ⑪ 伝説、昔話

当館では上の分野の資料を収集しています。

第2次民俗資料収集 さて第2次民俗資料収集というのは、民俗博物館オープン前の昭和49年9月までの第1次民俗資料収集に対して名づけられたことばです。別表②の通り、第1次民俗資料収集終了時点において、7463点を収集し、分類、整理作業がすすめられています。しかし、未収集民俗資料も多く、そのため民俗博物館オープン後も、未収集資料や、また既収集資料であってもより良好の資料などは続いて収集活動を行なっています。ここに第2次民俗資料収集と名づけられたのは、未収集資料のうち早急に収集しなければ消失してしまうおそれのある次の民俗資料を重点的に収集しようと計画されたものです。

(1) 生産・生業に用いられたもの

① 手工・製造用具

② 諸職用具

(2) 信仰生活に用いられたもの

講用具

以上の資料については、社会様式の変革とともに急激に散逸、消失してゆくものなのです。

経過 さて収集については、各市町村の教育委員会の文化財担当職員の方が窓口となって、民俗資料の所在を連絡していただくという組織で行ないました。これは民俗文化財に接する事の多い利点と、より詳しい情報をつかめるだろうと思ったからです。また地元の歴史を知るために役にも立つとも考えたからです。しかし市町村の文化財担当者の業務内容が多岐に亘り、かならずしも上記の通り民俗資料所在の連絡がうまくいったとはかぎりません。しかし文化財の保護等は、地方公共団体の任務である以上、民俗文化財についての保存などについて、お互に連絡をとりあって考えてゆかねばならないことです。

昭和54年10月 市町村教育委員会 協力依頼

昭和55年3月 市町村教育委員会担当者確定

昭和55年5月 第2次民俗資料収集調査打合せ会開催

以後所在調査・収集

連絡・収集 少し収集のことに触れておきますと、市町村から連絡があった場合、民俗博物館の職員が早急に現場へ調査に出てゆきます。現場において、民俗資料の計測、写真、聞き取りなどを記録してから収集します。収集した資料は、調査した記録をカード(原簿)に記載します。そうして燻蒸され収蔵庫におさめられるのです。

今回の第2次民俗資料では、各地からの連絡により表①のような資料が収集されました。それぞれ今日では得がたい貴重な資料であります。これら民俗資料についての詳細な事項については別の機会にゆずることにします。今回収集に際して市町村教育委員会から多大の御協力を得たことを記し厚くお礼申し上げます。

第2次民俗資料件名目録

表1

56. 3. 31

分 類	民俗資料件名	点数	採取地(市町村名)	寄 贈 者 氏 名	第2次収蔵対象分類
生産・生業 (農耕)	野神用具	12	天理市・橿原市・田原本町	山澤義治・村井義信・竹村 治	講
	柿波張りクライヌケ	1	天理市橿町	松山 隆	手工・製造
	板 箕	1	下北山村	中門 実	〃
	(染織)				
	藍染用具	7	月ヶ瀬村	杉生隆三	諸 職
	(手工・製造)				
	奈良うちわ用具	395	奈良市	氷室幸子	手工・製造
	両口箸作り用具	5	野迫川村	辻田欣弘	〃
	柿渋製造用具	6	大和郡山市	森田恒一	〃
	高野豆腐製造用具	25	野迫川村	倉橋嘉明	〃
(諸職)	吉野葛製造用具	2	大宇陀町	黒川重太郎	〃
	コンニャク製造用具	3	下市町	大川正智	〃
	梶蓋製作用具	6	〃	冷水朝次郎	〃
	奈良晒用具	1	奈良市	中川巖吉	〃
	桶製作用具	121	下市町・大宇陀町	大西康弘・松谷一二三・東庄作	諸 職
	カヤ屋根葺用具	10	榛原町・大宇陀町	吉岡忠雄・隅田隆蔵	〃
	経木製作用具	33	野迫川村	東辻藤作・山本ヨシノ・東辻末広	〃
	サシモノ用具	18	下北山村	中村秀一	〃
	ウルシ塗り用具	10	大和郡山市・下市町	和田ウサ・上田梅吉	〃
	ヌシヤの看板	1	大和郡山市	和田ウサ	〃
交 易	講用具	153	奈良市	村田善一	講
	古文書	28	奈良市・御所市	辰己義松・松浦士郎	〃
	信 仰				
信 仰	庚申講	34	大和郡山市	井村良襄	〃
	観音講	1	〃	〃	〃
	念仏講	23	奈良市	村田義一	〃
民俗芸能 娯楽・遊戯	行者講	12	奈良市・野迫川村	塚本雅信・城本勢次・倉橋嘉明	〃
	出雲人形	17	桜井市	水野美津子	手工・製造

① 詳細な目録は、民俗博物館だより 通巻26号参照

② 3月末以後第2次民俗資料収集対象資料受入がありました。藤箕製作用具〔山添村・山上見〕・コモアミ用具〔十津川・十津川村資料館〕・三方製作用具〔下市町・池田喜代次〕・竹箕製作用具〔天理市・橿原市・奥本勝、他2名〕

表2

分 類	第1次資料収集点数 (S49年9月末)		S49年10月～ S55年3月末増加点数		第2次民俗資料収集増加点数 (S55年4月～56年3月)		現在収蔵総点数 (S56年3月末)	
	寄 贈	寄 託	寄 贈	寄 託	寄 贈	寄 託	寄 贈	寄 託
衣	762	8	91	0	2	0	855	8
食	1095	27	144	0	84	0	1323	27
住	947	25	94	0	20	0	1061	25
生産・生業	2643	412	336	103	665(656)	-395	3644	120
運輸・交通	291	4	19	0	2	0	312	4
交 易	437	23	113	0	2(1)	0	552	23
社 会 生 活	573	11	125	0	181(181)	0	879	11
信 仰	139	1	423	0	70(70)	0	632	1
民俗知識	360	27	88	185	29	0	477	212
民俗芸能	72	17	29	0	19(17)	0	120	17
人の一生	113	2	20	0	0	0	133	2
年中行事	31	0	32	0	17	0	80	0
計	7463	557	1514	288	1091(925)	0	10068	450

① 第2次民俗資料収集覧の寄贈項の()は第2次民俗資料収集対象資料の点数を意味する。

今後の課題 民俗博物館の任務の一つとして民俗資料の収集は今後も続けてやってゆかねばならないのは当然のことです。しかし単によびかけのみに終らぬためにも、今後も市町村との共同によって、計画的に県内各地の民俗資料の現地調査を根気よく続けてゆかねばならないでしょう。

もう一点として、市町村に建設されている

資料館との関係です。県下にすでに10ヶ所程の資料館があり、今のところ当館との十分な結びつきがなかったが、同じ民俗文化財をあつかう機関であり、同じような問題(たとえば整理・活用・研究面)をかかえており、今後、この面でもかかわりを深めてゆかねばならないであろう。



三面スライドの映像制作にあたって

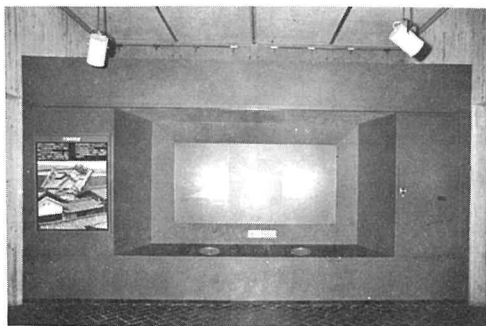
—映像展示とソフト制作—

大宮 守人

当博物館展示室で唯一の映像装置である三面オートスライドの映像を、新たに制作するための予算が認められ、「はた織り」（仮題）と題して、56年度で写真収録、57年度に映像構成、録音編集をし、映像と解説、音楽・制御信号を同調させ装置に組み込む業務を、それぞれ専門業者に委託する。

●映像展示としてのオートスライド

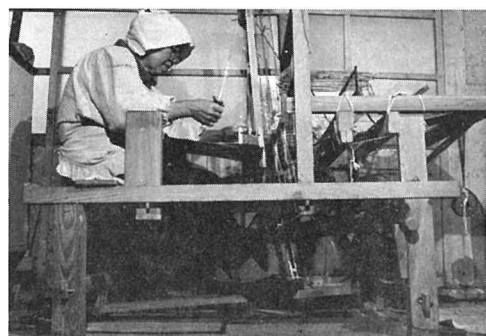
当館の常設展は、稲作・茶業・林業・職人のコーナーを設け、生業というテーマで統一して、大和の地形的な特色の中で育まれた昔



▲三面オートスライド映像スクリーン



▲三面オートスライド映像装置（スライド3台）



▲「はたおり」状況（昭和56年度映像化のテーマ）

からの仕事と、それらの仕事に必要な道具を作った職人の様子を、人形・絵・写真などで様々な展示資料が、最少限どのように使われたのかを理解出来るようにしている。

そして、その中に1ヶ所だけ映像装置を設け、展示室の内容と部分的に関連させながら民俗学的な視点の1例をこれによって紹介し、常設展を大きく締めくくる役割を持たせている。比較的に静的な展開が多い中に、動きのある映像を持ち込む事で、入館者の心的飽和を防ぎ、変化を持たせる事で展示効果を高めようとしている。

このたび制作しようとする「はた織り」では、広い民俗学の研究領域（衣・食・住・生産・生業・交通・運輸・通信・交易・社会生活・信仰・民俗知識・民俗芸能・娯楽・遊戯・人の一生・年中行事、等）の中から、衣生活に焦点をあてる事にした。

昔、はた織りは女の仕事として重要視され、嫁入り仕度の中には、自分で織った布や着物、布団、刺子の風呂敷などを入れて1人前の女性である証の一つとした。

現代の衣生活ではそのほとんどを購入し、衣服の素材である糸や布まで自給する事はなくなっている。

こうした買うくらしとつくるくらしの違いの一端を、県内にわずかに残る^{もめん}木綿織りや^{あい}藍染め、かつては盛んであった奈良晒^{さらし}のなごりである麻織りなどの伝承技術を通して示すことにある。

これらの映像は共に、8分～10分程度のもので、内容的にもかなり要約し、民俗学的な視点の一例をあげて簡略に説明するという点に目標を絞っている。

このねらいは、概ね成功しており、入館者のほとんどは、この映像を最後まで見、ここに集中している。

また、アンケートに対してもこの装置については、肯定的な評価が大勢を占めている。

●映像の制作

コマーシャルフィルムなどの短い映像制作

では、その要点を圧縮する関係上、撮影総量の10～20%程度しか活用出来ないとされているが、当館の場合は、映像構成に必要なカラースライド写真は、撮影対象の一部始終をもれなく収録した中から抽出する事にし、それ以外のものは写真資料として保存する。

例えば、今度制作する「はた織り」では、現在県内にわずかに残る、伝統的な技術。

木綿織り(紺紵と縞) 山辺郡山添村箕輪
藍染め 宇陀郡室生村下笠間
麻織り 添上郡月ヶ瀬村尾山

を、古い衣生活の中で育まれた伝承文化としてとらえ、その作業工程をもれなく収録し、その中から三面オートスライドに組み込むべきものを抽出する。

この方法では、最終的には一般公開用の他、詳細な資料の蓄積も同時に行え、専門研究者の要望にも応える事が出来る。

これは、資料の収集・調査研究の成果の上に展示が行われるという博物館活動の原則に沿うものである。

●映像展示の課題

映像装置による効果は、内容さえよく検討されておれば相当大きなものであるが、同一

展示場内で何台も使うと、かえって新鮮さが失われ、効果が発揮出来ない事もある。

特に一般入館者向けの映像では、専門的な内容について意をつくそうとすると上映時間が長くなり、途中で逃げられる事も多い。

初めて来館する人々にとっては、どの展示物も新鮮な印象を与えるであろうが、2回・3回と訪れる場合には、少なくとも何らかの問題意識を持っている人と思われる。

これらの人々にとっては、表面的な簡易さよりも、深みのある内容と種類の豊富さが嬉しく納得いくまで何回も利用されるであろう。

これにこたえるための方法として、空間に制限のある小博物館においてこそ、映像機器や専門図書、資料検索装置などを配置した特別コーナーを設け、様々な問題意識にこたえ得る選択度を増すことこそ博物館の存在意義を掲め利用度を上げるのではないかと考える。

表現効果の豊富な映像こそより高度な内容を語るのにふさわしいものであり、これからの博物館における映像展示は、1つ1つの調査・研究の成果として、多くの種類を並列し、小規模な装置によって、個々に利用出来るのが望ましいと考える。

◆大和の民俗行事 ②③◆

大和の三大練供養会式

—当麻寺・矢田寺・久米寺—

奥野義雄

わが国の文化が農耕を基盤としたものであり、この農耕にかかわる宗教儀礼との融合によって、農村の文化が成り立ってきた、といっても大過ない。

ここで紹介する大和の民俗行事の内、三種三様の練供養会式一宗教的色彩の中で、農耕の四季、すなわち農業に従事してきた人たちの姿を垣間見ることができるよう思う。

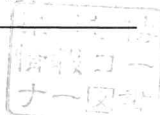
大和にのこる練供養、すなわち二十五菩薩練供養会式は、各寺院の寺伝・縁起によって営まれている。たとえば、当麻寺(当麻町当麻)では中将姫を、矢田寺(大和郡山市矢田町)では満米上人を、そして久米寺(橿原市久米町)では久米仙人を主役にして、二十五菩薩が練り歩くのである。

まず、当麻寺の二十五菩薩練供養会式的一端を紹介することからはじめよう。

当麻寺は、当麻氏の氏寺として古代平安時代に建立された寺院であり、「中将姫伝説」の寺として周知のとおりである。この伝説は当麻曼荼羅の外縁に描きだされていて、曼荼羅自体が一種の絵解きに使われたものであったと考えている。そして、この絵解きとしての曼荼羅は「極楽往生」を民衆に解きあかすには十分な効果をもたらしたと思う。中将姫が極楽往生する物語が絵によって表現され、人の視覚に訴えることで、浄土思想は民衆に充分理解されえたであろう。

この伝説をもつ当麻曼荼羅を安置する曼荼羅堂(本堂)と娑婆堂の間に仮設された橋を二十五菩薩が練り歩くのである。

毎年5月14日(旧4月14日)に繰り広げられる「当麻のお練り」は、この地域の農家の人たちの「ハルゴト」であり、「当麻レンゾ



(練座)、と呼ばれている。

当日午後4時頃、1番太鼓と鐘を合図に、極楽往生へ的一幕があがり、曼荼羅堂と娑婆堂との間で来迎のパノラマが見物人の眼前に映しだされるのである。

僧侶に導かれた法如尼、すなわち中将姫の像が娑婆堂に移された後、本堂では浄土・真言両宗の僧侶が法要を営み、その読唱の低く鈍い声が本堂を包む。やがて浄土宗の僧侶が中将姫像に勤行し始めると、2人の天童を先頭に本堂から、介添人に引かれた観音菩薩が来迎すべき蓮坐を持ち、勢至菩薩が合掌したまま、そして普賢菩薩が天蓋をたずさえて、中将姫像を安置する娑婆堂まで練り歩くのである。この三菩薩に続いてのこりの菩薩が進



▲当麻寺



▲矢田寺



▲久米寺

む。そして、娑婆堂に赴いた二十五菩薩は、しばらくして中将姫の化身である宝冠阿弥陀坐像を蓮台にいただいた観音菩薩を先頭に、ほかの菩薩も本堂へ向うのである。このとき、^{ほとけ}「救い仏」と呼ばれる観音菩薩は優雅な舞いに似たふるまいでゆるやかに練り歩いていくのである。

このゆるやかな「救い仏」の舞いは、あたかも極楽への引接を歓喜しながら進み行くように映じる。この当麻寺の練供養会式に関する民俗的事柄の詳細はここでは割愛するが、この会式に使われる観音菩薩の面を被る(地元ではカツグという)と長生きできるという伝承がある。ここではこの事例を提示するにとどめ、矢田寺と久米寺の練供養会式の紹介に移ることにしよう。

矢田寺と一般に呼び親しまれている金剛山寺の二十五菩薩練供養会式は、当麻寺のそれと同様に「矢田レンゾ」と称されている。

この矢田寺の会式も、矢田寺に止住していた満米上人の伝説にもとづいて描きだされたものである。すなわち、地獄の閻魔大王から「自らの悩みを除くために菩薩戒を受けるべき戒師を紹介してほしい」と依頼された小野^{たかむら}篁が、矢田寺の満米上人にこの大役を任じた。満米上人は地獄へ赴き、大王の戒師を勤めあげた。大王はその返礼に地獄見物を上人にさせたのであるが、この地獄界に落ちた民衆の苦しみを一身に受けとめている地藏菩薩の御姿に感激した上人は、娑婆へ戻ってから地藏菩薩を彫り、矢田寺に安置し、菩薩の徳を世に広めていったという。

これが矢田寺の地藏縁起の大略であり、この縁起をもとに矢田寺の会式は構成されている。毎年4月16日(午後3時頃)に地藏菩薩来迎の絵解きが再現されるのである。

一方、久米寺の二十五菩薩練供養会式も、金堂と護国道場の間に架けられた仮設橋の「来迎橋」で「お練り」が繰り広げられる。先頭には僧侶、これに続いて数十人の稚児、輿に安置された久米仙人像、そして観音菩薩を先頭に介添人に引かれた二十五菩薩が練り進むのである。以上が大和の練供養会式の三種三様の姿である。

(1981.5.11了)

地方博物館を考える ⑪

博物館と教育普及活動

—とくに展示活動から—

徳田 陽子

博物館は、不特定多数の人々が利用する教育活動の場である。子供から大人まで、普通の利用者から特に何かに関心をもっている人までがすべて活用できる生涯教育の場である。

博物館を利用する側にとって、まず、目につくのが展示活動である。博物館側にとっても、展示活動は、博物館利用者を一番多く動員できる事業である。そこで、展示を軸に、博物館と教育普及活動についてみてみよう。

博物館の展示は、「学芸員の問題意識に沿って調査・研究がなされ、その成果並びに新たな問題意識が展示に凝集され、それを拠り所として入館者が自問するという形が本来のもの」であり、「展示の方法についても研究同様に重視されるべき」であり、「多くの具体的な資料を有している博物館がそれらの資料をいかに有効に活用しうるか、といった側面^{註1}から博物館の独自性を求めるべきだという松崎憲三氏のことを肯定すると共に、さらに考えてみよう。

博物館は、自発的に利用する所だといっても、人によって、利用方法に大きな違いがある。研究者は、展示資料をじっくりみて回ったうえで、展示資料だけでは物足りず収蔵資料もみたいとか、質問があるとかいって、積極的に、学芸員室へ来られることもあり、直接に話を聞き、学芸員にとっても勉強になることも多い。

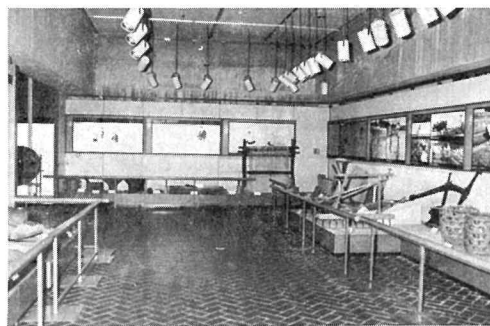
問題は、漠然とした気持ちで博物館に来た人々である。いかにしたら、関心をひくことができるか、である。そこにこそ展示の方法が重要視されるゆえんがある。

一つのテーマにそって、分類学的、又は歴史・発達史的な固定展示だけでなく、動態展示・生態展示を取入れる必要がある。民俗資料の場合、動態展示はかなりむづかしい。当館では、それに近いものとして、郷土学習室を、追体験の場として、いくつかの民俗資料において入館者に自由に使えるようにしたり、平均して月1回ぐらい、体験学習講座を開いたりしている。

展示は、見学者が展示資料をみるだけでそれが何であるかを理解し、興味を示し、自分なりに考えてみようとする気持ちになるように工夫する必要がある。その点で生態展示は、展示の導入部分で、展示のテーマを理解してもらううえからも必要である。テーマの目的に即した展示資料とそれに関連した資料とを組み合わせ、一つの空間に細部まで気をつけて配置して、民俗資料の当時の使用状況に近い状態の再現に努めることが大切である。

展示の導入のあとの見学者の導線の工夫も大切である。導線が途中であやふやになりやすい展示は避けるべきである。導線とは、見学者が、展示資料をみるために一番よいコースを示すのであるから、展示の担当者は、何度も、自分で展示物をみながら、どうすればよいか体験的に努力すべきである。

博物館の展示場は「一個の人工的環境である(中略)変更可能な環境である^{註2}」から、展示替のたびに、テーマ内容や展示資料により、



▲ 稲作コーナー



▲ 生業を支えた職人コーナー 鍛冶屋のジオラマ

展示台の配置変更・導線の工夫などを行うべきである。特に、民俗資料は、資料そのものがあまりひきたたない場合が多いうえに、資料の大きさもまちまちであるから、展示場の広さは同じでも資料の展示にはできるだけ変化をみせる必要がある。

展示資料は、収蔵資料の一部である。その収蔵資料を有効に活用して展示をするためには収蔵庫の整理が必要である。収蔵資料のなかに同じ資料が何点かあることもある。ときには、博物館のある大和民俗公園の中に移築復元している民家内部に置くために、わざわざ何点も収集することもある。民家用の資料や郷土学習室の資料・体験学習用の資料は、永久保存用とは別にして、教育普及活動用の資料として一括しておくことも、長期展示や実習による資料の痛み工合を考えると、一つの方法である。

展示は、「学芸員の側からみるならば、自己の問題意識の表現である展示に対して、入館者がどのような反応を示したかを確かめることにより、常に自己を検証しえ、そうした手続^{註3)}を経ることによって自己練磨できる」場

であり、こちらから積極的に見学者に話しかけたりすることによって、こちらも勉強になるという関係が、見学者と学芸員の間に生まれ、相互補完的な役割も果たす。

以上のように、博物館は、生涯教育の場であり、博物館の研究成果を生かして、展示を工夫し、積極的に、地域住民の日常的な博物館の活用に役立てるようにしていくことが大切であるが、博物館の催し物としては、ほかに、講演会・実習会(当館では体験学習講座)・映画会・見学会等の「みる・きく・作る」という大きな要素に分けられる活動を行なっている。これらを総合した活動が、博物館における教育普及活動である。展示内容と他の催し物をうまく組み合わせた年間計画をたてるよう努める必要がある。

- 註1) 松崎憲三「社会教育と展示をめぐる」
『奈良県立民俗博物館だより』 Vol. III
No. 2 昭和51年
註2) 富士川金二『改訂増補 博物館学』
成文堂刊 昭和52年
註3) 松崎前掲

★★★★ お 知 ら せ ★★★★★

民俗博物館の行事予定

☆テーマ展「日々のくらし一台所の民俗展」

期間▷⁵⁶4月8日～9月27日

☆体験学習講座

テーマ▷「カゴづくり」 講師▷中西浩文氏

日時▷6月28日 午後1時から(1回実施)

※今年度より当講座は募集制としているため、往復ハガキで申込んで下さい。応募者以外も参加できますが、実習材料に限りがあるため、材料の配布がありませんのでご了承下さい。

テーマ▷「夏休み特集一むかしの玩具づくり」

日時▷8月1日～8月2日 午前10時半から

※学習内容の詳細は応募の折に問い合わせ下さい
(新聞等で広報いたします)。

☆第2回民俗学カルチャサロン

民俗コース(講義)

テーマ▷「カミガミの民俗」、他

日時▷7月26日(第1回)

隔週日曜日実施 午後1時30分から

実習コース・テーマ▷「フゴづくり」、他

日時▷10月25日、11月22日、12月19日～

12月20日、午後1時から

民家コース(講義)も3回実施する。

(詳細は当館へお問い合せ下さい)

☆特別テーマ展「日本人の祈り一小絵馬」

期間▷10月8日～11月29日

《表紙解説》 毎年7月18日、お盆の時期に村の観音講の人たちによって、観音まつりが行なわれる。西国三十三ヶ所の霊場の御詠歌を詠唱し、観音菩薩の慈悲にあずかることと、菩薩を慰める行事である。

■ 編集後記 ■

暖い日が続くと、また雨の日が来る。そして、朝夕まだ肌寒さを感じる6月半ば。

一年にして館長の交代があった。旧職のイメージを脱しつつ、目新しさを創ろうとした人。各領域の仕事を理解しようとする人。この新旧交代のさ中でも館の存在が何に支えられているかを問いかけていかなければ。特定層か、県民全般か。独断か。話し合いか。いずれその答えは「山彦」として戻ってくるかもしれない……………。(✕)